

あかね祭 地域と共に30年

まじりあひしり

中野先生は55年間に渉り丸岡町本町に診療所を開業されて医療、文化、行政に過大な貢献をされて来られました。8年前に奥様を亡くされ、診療所も閉じられ、晴耕雨読の生活をされておられます。この度は、当院30周年記念のご講演をお願いしました。

私は、大正十年一月 羽崎の藤田長之助・テルの四男として生まれ、磯部小学校の尋常科を昭和八年に卒業しました。羽崎の同級生は5人で男3人・女2人でした。男3人の内、生残っているのは私だけです。

昭和5年に磯八会を発足し、毎年同級会を開いてきました。昭和の頃は一泊二日で芦原温泉に二十名程の参加でした。平成になると泊まりはなく、幹事の中田一三さん(磯部島)のお世話もあり、領家の「ふ志多」が多くなりました。ところが18年1月に中田さんが亡くなりその秋、男三人女四人で開いたのが最後でした。

小学校卒業後、福井中学校に入りその後、昭和12年に京都府立医大予科に入学しました。母の実家が中野病院を経営して、叔父夫婦に子供がいなかったんで養子に入る事にな

なったのです。

予科一年の冬休みに丸岡に帰り、母の読んでいた『主婦の友』に吉田絃二郎の最近亡くした奥さんの追憶記事がありました。絃二郎に魅せられました。次々と本を読み、常に持ち歩き愛読しました。学校の勉強は図書館で済ませ、歩いて4



「私の歩んできた道」 中野 明 氏

kmほどの下宿まで帰っていました。何か、学校の勉強だけでは物足りなく感じ、その挙句もう養子は嫌だと・・・実家に帰りたいたいと思うようになり予科二年の終り頃に羽崎の両親に意を決して打ち明けたのです。

相反する思い

父は、産業組合連合会の仕事で多忙を極め神経衰弱に近い状態で深谷温泉に行っていました。母にどう話したか覚えてないのですが、ただ「小鳥でさえも、自分の巣は自分で作る。だから私は養子に行きたくない」と。そして、母は「判った、丸岡の病院は私の方で話をするから、お前の思い通りにしなさい」という返事だった。直ぐに、石川の温泉で療養している父の所に行つて、母と同じことを言つたと思うのです。父は「養子をやめるのならわしの首を切つてからやれ」と。それから後は何も覚えていないのです。泊まったことは確かです。母はお前の思い通りにやれ、父はわしの首を切つてからやれと全く相反することでした。

戦争中のため6年半で卒業し、軍医として満州に・・・負けて捕虜になってソ連・国民軍に占領されて、奉天の陸軍病院を去る。帰ってきて、福井地震で全壊するなど色々ありました・・・結局、岩手の無医村へ行ってそこで、初めて医師になろうという、医師

として生涯を捧げる気持ちになったわけです。

読み直さぬ

それで、今日お話ししようと思うのは、何で自分がその養子を嫌ったか、養子にならないということとは医師にならないということですが・・・今回の講演をするに当り、いたい吉田絃二郎の記事がどんなもんだつたかを調べようと思つたのです。丸岡の図書館で『主婦の友』を探したが、扱っていなかった。困つたなあと思ひました。そこで、主婦の友の本社に電話しました。そうしたら、東京のお茶の水図書館では全巻閲覧できるようになつているとのことでした。早速、問い合わせたところ、「あなたの言う昭和12年の12月号にはその記事はありませんが、9月号には吉田絃二郎の『日は過ぎ行けど』という妻を思う記事があります」ということでした。それをコピーして、4ページで800円、送料140円で送つて呉れました。

91歳になつてこの文を読むのと、16歳の若者が読んだのと感想は違ふと思ひます・・・